

Virginia Tufte : *Grammar as Style*

山川喜久男

文体論 (Stylistics) の位置付けは言語学的に、また文学的に多様であるが、文体研究が書かれた言語の表現技法を対象とすることがある。その場合の文体論は、その目標において、古典的な修辞学 (Rhetoric) と部分的に一致するが、言語学的基盤に立つものとしては、文の構造に対応する意味機能を扱う統語論 (Syntax) の延長線上にあるものとみなすことができる。

Virginia Tufte の本著は、このような応用言語学としての文体論の局面を極端まで押し進めて、アメリカの学生や素人作家のための作文修業に役立てることを目差し、典型的英文の構造分析を行なう基本的統語論の知識のもとに、なお一段と掘り下げるべき「文体としての文法」を説いたものである。このように本書は、その趣旨においては、実践文体論ないし教育的文体論ともいうべきものである。しかし、注目すべきことは、実際には、統語論ないし修辞法の各範疇のもとに配置した現代英米の作家・評論家、あるいは新聞雑誌類からの総数千余に及ぶ引用例——これを著者は “samples” という——が本書の主体をなしており、それに基づいて文体論の次元でとらえた統語論を展開していることである。

著者も「序」(Preface) で断わっているように、本書は豊富な引用例によって体系的な論述を試み、断定的な結論を引き出すことよりも、引用例そのものを観察し探求すること

を目的としている。読者はまず本書の特色とともに、この限界を認めなければならない。初めにまず顕著な表現の例を掲げ、つぎにそれに即して適宜解説を加えるという過程を繰り返す筆法の叙述は、「文体としての文法」に関する客観的真理を悟ろうとする読者の期待を満足させてはくれないのである。

しかし、そのような本書においても、第1章「文法と文体の関係」(The Relation of Grammar to Style) で、「文体としての文法」の理論づけがなされているのは注目される。ここで、著者は、主として Richard Ohmann の説を参考としながら、つぎのように推論している。作者が自分の文体を作り出すとき、まず自分の材料とその配列法について選択をする。つぎに、選択した内容を、読者になるべく効果的に印象づけようと努め、自分の声でできるだけ情をこめて言い聞かせるように表現する。さらに、読者に知的的好奇心を呼び起こし、それを、不完全な状態から完全な状態へ、不調和なものから調和のとれたものへと、満足させてゆき、一つのリズムを構成する。統語法が文体にかかわってくるのは、この段階においてである。詩と同様、散文も、その本質は音読してみても、聴覚に訴えさせることにある。それは全体としての一つの構造と把握されるのではなく、時間的に進展してゆく連続体として聞きとられるものである。散文のこの特質が文体と統語法を融合させるのであり、ここに「文体としての文法」が観察されることになる、という。

言語活動の機能を表現にあるとみる限りにおいて、文体論が言語学の枢要な位置を占めるべきものであるとは、だれも認めることであるが、実際の文体研究はとかく主観的印象に頼りやすく、非科学的になりやすいという弱点をはらんでいる。とくに、文構造上の意味機能を究明する統語論を文体論的に深化し

てゆくべきことを考えながら、方法論的に基準がつかめない歯がゆさを感じているものも、少なくないであろう。そのような実情のもとにあって、Tufté の『文体としての文法』は、修辞学的観点に立ち、実用的・教育的目的を意図したものであるにせよ、文法的文体論の道を切り開いたものとして評価されよう。

本論の 15 章のうち、2 章から 8 章までの「核文」(Kernal Sentences), 「名詞句」(Noun Phrases), 「動詞句」(Verb Phrases), 「形容詞と副詞」(Adjectives and Adverbs), 「前置詞」(Prepositions), 「接続詞と等位」(Conjunctions and Coordination), 「従属節」(Dependent Clauses) や、11 章の「同格語」(The Appositive), 12 章の「疑問・命令・感嘆」(Interrogative, Imperative, Exclamatory) などは、それぞれ文法範疇を主題として、一般的な統語構造が、現実の作家によって、どのように活用され、具体的文脈に即して、どのような文体的効果を挙げているかを観察している。

まず、実際に文体観察の対象となる多様な文の基礎となるべきものとして、核文という統語法上の単位をとりあげる。核文とは、構造主義の認定によるものであるが、つぎの 4 種の文型からなる。① be 文型 (*e.g.* Work was his life. — Carlos Baker, *Ernest Hemingway*), ② 繋合動詞 (Linking verb) 文型 (*e.g.* The maid looked doubtful. — Dorothy Parker, *Big Blonde*), ③ 自動詞文型 (*e.g.* The train chuffed round a curve. — John Wain, *A Travelling Woman*), ④ 他動詞文型 (*e.g.* Life struck her across the face. — Alan Paton, *Too Late the Phalarope*)。この核文が複雑で多様な文の根幹をなすばかりでなく、とくに論説体の散文で、つぎのように、文節中の主題文 (Topic sentence) として活用され、いわば統語的関節

の役を果たす、という。

…and in utter abjection of spirit he craved forgiveness mutely of the boyish hearts about him.

Time passed.

He sat again in the front bench of the chapel. The daylight without was already falling…

—James Joyce, *A Portrait of the Artist as a Young Man*.

4 種の核文のそれぞれに潜在する動的意味要素の多寡とともに、核文のもつこのような文体的適応性は注意されるべきである。

文を構成する基礎的な要素を名詞句と動詞句とにする分析法は、変形文法に準じている。ほかに、13 章「受動変形」(The Passive Transformation) も変形操作の概念をとりいれており、9 章「文開始語と倒置」(Sentence Openers and Inversion) で、「there 変形」(*there-transformation*) とか「it 倒置」(*it-inversion*) という概念をあげていることについても、同じことがいえる。これは、固定したものとしての文構造の分析ではなく、動的に文を構成してゆく際の表現上の技法の考察を行なおうとする本書の主旨にかななったものとみなすことができよう。もっとも、名詞句や動詞句を統語上の機能の要素とみなしているのか、それとも構造形式上の単位とみなしているのか、明確でないという、変形文法そのものにつきまとう難点だが、そのままここにも引き移されているが、一応この範疇設定によって、統語法の枠組に乗った文体手順とその効果に対する全般的観察がなしおされている。

一体に、統語法の範疇をもとにしている部分には、構造形式とその位置関係による分類に従って、引用例を配置するといった実証的説明文法の趣が濃いのであるが、その中においても、なお、あらかじめ例を用意しておい

て、それが適応する主題をあとから設定しているとも思える箇所がある。たとえば、動詞句の章に「動詞の節約」(The Economy of Verbs)と題する項があり、Marianne Mooreの随筆“Compactness Compacted”から、つぎのようないくつかの例をあげている。

Women are not noted for terseness, but Louise Bogan's art is compactness compacted. (p. 130)

Best of all is the embodied climax with unforced subsiding cadence. (p. 132)

この例におけるように、過去分詞や現在分詞を有効に用いることによって、それぞれ…compactness that has been compacted/…the climax that has been embodied and that has a cadence which is unforced and which subsides という関係詞節を含む表現で、「引き緊まり」(“compactness”) という観念そのものにそむき、ほとんど「自然な」(“unforced”)とはいえず、とうてい「沈下し」(“subside”) そうもない構造を避けている、という。引用例そのものがやや特異でありすぎるともいえるが、それは文体研究書としての本書のそれなりの趣旨にかなったものと認められる。それよりも、ここで言いたいことは、もっと文体を統語法に密着させ、英語の統語形式のもつ文体価値を一般的に考察してほしかったということである。この場合、過去分詞や現在分詞が被修飾語である名詞に対し、前置された場合と後置された場合との、さらに後置された分詞と関係詞節との意味上ないし表現価値上の相違、あるいは連体的に用いられた場合の過去分詞と現在分詞の相 (Aspect) の差異についての考察など、いわば、統語的潜在性が具体的文脈の中でどのように顕在化され、具現されているかという点への観察があってほしかったのである。

接続詞と等位の章でも、等位が締めきなく、

緩やかで、力強さに欠け、従位 (Subordination) が引き締まっていて、強要的であるという観察が、個々の引用例に即してなされている。また、従属節の章では、関係詞節 (Relative clauses) と従節 (Subordinate clauses) とを、一応、拘束修飾 (Bound modification) と自由修飾 (Free modification) という従属節全体としての機能面でもとらえてはいるが、who, which, that という英語の関係代名詞がそれぞれどのような潜在性があるか、拘束節と自由節とのいずれかに選ばれているのかという面にまで立ち入った考察はなされていない。

引用例を散発的にあげ、それに即して観察を続けてゆくという筆法は、10章「自由修飾語・右岐文と中岐文と左岐文」(Free Modifiers: Right-Branching, Mid-Branching, and Left-Branching Sentences), 14章「並行」(Parallelism), 15章「結合の緊密さ」(Cohesion) と、さらに最後の16章「統語的象徴・類比としての文法」(Syntactic Symbolism. Grammar as Analogue) という修辭法的色彩の濃い部分に、いっそう目立ってくる。

このうち、自由修飾語とは、また非制限的修飾語 (Nonrestrictive modifiers) ともいい、拘束修飾語 (Bound modifiers) または制限的修飾語 (Restrictive modifiers) に対立する範疇であり、それは核文の前部に、あるいは中間部に、またあるいは後部に添えられて、陳述の主体への副次的な意味を微妙に加えるものであり、「文体としての文法」にとってもっとも興味ある課題である。“right-branching,” “mid-branching,” “left-branching” という用語も、問題の表現様式の特徴を端的に象徴していて、妙味がある。ただ、左岐文は往々前部偏重 (front-heavy) の弊に陥りやすく、中岐文は論理的に調整された

緊縮性があり、右岐文すなわち累積文 (Cumulative sentences) は、人の思考過程に沿う前方へ向かっての追加拡大という線状的進行の本質に即したものであるなどという、注意すべき見解が披瀝されてはいるが、統語構造と意味のリズムの原理に関する有機的洞察のなされていない点が惜しまれる。倒置を扱った9章の冒頭に引用されている「文動学」(Sentence dynamics) 説は、この自由修飾語の章にこそ参考とし、その原理の上に組織的に織り込まれるべきであった。また、受動変形の章で述べている「主要な強勢を文末部に置くのが、短い核文型などのような英語の簡潔な発話の本性である」(p. 193) という原理も、ここに活用されるべきであったと考えられる。

ここでも、統語法への密着という点で欠けているところがある。自然で融通無礙で、「職業的作家の基本的用具であり、近代小説の頼みの綱である」(p. 159) という右岐文に、末尾同格語 (Final appositive) や分詞句や主格遊離句 (Nomunative absolute) が用いられている例をあげている。しかし、これらの構造との統語的類縁性の上からも、また累積的自由句としての適応性の上からも、とうぜん Chips sat by the fire again, *with those words echoing along the corridors of his mind.* (James Hilton, *Goodbye, Mr. Chips*) におけるような with 句 (*with*-phrase) も加えられるべきであった。

しかし、著者が並行の章で、

Language is finite and formal; reality is infinite and formless. Order is comic; chaos is tragic.

—John Updike, *Rhyming Max.*

におけるような対句構造 (Antithesis) に現われる視覚上の均衡 (Balance) は、実は聴

覚上のリズム (Rhythm) の反映にほかならず、散文が、このように、詩におけると同様なリズムを構成するとき、統語法がリズム化したことになる」と述べているところには、全巻に流れる本書の基調としての理念が読みとられる。

最終章は「文体としての文法」の言わんとしていたものを総括した重要な章である。統語的象徴とは、一般的な言語の機能としてではなく、特殊な文法の機能として、一步隔たった所から作用するものであり、非言語的なものを暗示的な配語法によって描き出すことである。つまり、類比としての文法である、という。たとえば、

In a moment the vision faded but she remained where she was, *immobile.*

—Flannery O'Connor, *Revelation.*

における *immobile* は、隔離された叙述同格語としての統語上の機能を帯びながら、散文のリズムが急止した位置に表現され、「静止した」(“immobilized”) 状態を象徴している、という。

前章までにあげている多くの引用例も、多かれ少なかれ、何らかの形で、この統語的象徴の機能を果たしているといえるものであり、「文体としての文法」の意図するものは、窮極的には、統語的象徴を適度に、かつ有効になしうる表現力の陶冶なのである。この場合、象徴される事象は千差万別で、その数は無限であるのに対し、その象徴のために用いる統語的手段ははるかに少なく、その数は有限である。作家は有限の統語的手段を駆使し、そのわくをはみ出してまで無限の象徴をなしおおせているのであるが、そこに見られる緊張関係こそ、「文体としての文法」の精髓である、という。

要するに、本書は多彩な現代作家からの範

例を基にした英語の散文文体の実践的研究書であるが、著者自身も認めている限界を考慮に入れたかぎりにおいて、文体論と統語論との理論的関連性を示唆しているものと評価すべきである。

Virginia Tufte: *Grammar as Style*.
1971. Holt, Rinehart and Winston, Inc.